

以上から句のピッチレンジは談話種別というよりは、句が長い場合、有核語の割合が多い場合、佳境部や疑問文などの場合にいずれも大きくなり、女性のほうが男性より平均して大きいことが明らかになった。しかし、この結果が、談話の性質がピッチレンジにまったく影響しないということを示すものではないだろう。例えば長い句が多く、佳境部、つまり話が盛り上がった場面と言ったときに、お経や眠気を誘うつまらない講義よりは、そうではないある種の談話場面を想定する方が容易なのは、何らかの場面や談話の性質がそこに現れる言葉、特に韻律と無関係ではないことの一つの傍証だと考えられるからだ。いずれにしても、さらなる実証研究が必要であることは言うまでもない。

4-3. 各談話における言い淀みと言い直し・フィラー・相づち(間投詞)

ここでは談話を構成する要素として発話内容には直接関係のない言い淀み、言い直し、フィラーに注目する。フィラー(filler)というのは Brown, G.(1977)によれば、発言権を維持するための間をつなぐための言葉である。中川他(1995)などのように間投詞と呼ぶものもあるが、相づ

ちの「はい」や「ええ」などと区別するため、ここではフィラーと呼ぶ。また、発話者自体の発話ではないが、対話者による相づちについてもここで扱う。

はじめに本研究の資料全体に関してこれらの要素の特徴を概観した上で、話者ごとにその詳細を明らかにする。ただし、本研究は各種談話の韻律パターン、つまり「話調」の解明を目的とするため、これらが談話全体の音調に関わる範囲において、特にポーズやイントネーションとの関連において言及するにとどめる。

言い淀み、言い直し、フィラー、相づちなどは、話し言葉、特に自然な日常の会話には非常に多く見られるものであり、対話者のある音声談話に特有の現象である。そのため、これまでも様々な角度から研究されてきた。音声談話に関する定延他(1995)、田窪他(1997)、杉藤(1997b、1993)、マドセン(1999)、水谷(1984)などの諸研究だけでなく、コンピュータの音声認識に関連した研究でも詳細な実証的研究が行なわれている(中川他 1995、小磯他 1995、神田他 1996、堀内他 1996、Shriberg 他 1992、Nakatani 他 1993、1994 など)。これらを細部にわたって明らかにすることを目的としない本研究においては、上記の諸研究を参考にしつつ、本資料におけるこれらの振舞いを特に音調面から俯瞰していく。

はじめにこれらが含まれる本研究の資料中の談話全体について、各種の先行研究の結果を参考に概観する。そして次に各談話別に言い淀みやフィラー、相づちなどについて、イントネーションやポーズとの関係をさぐり、これらが談話全体の音調にどのような影響を与えているか、対話模式図を参照しながら見ていく。

4-3-1. 本資料全体における言い直し・フィラー・相づち(間投詞)の傾向

中川他(1995)によれば、言い直しは10文に1回以上の割合で現れ、文が長いほど発生しやすいという。また言い直される語句の直後は85%の割合でポーズが現れているという。言い直しの下位分類については、大塚他(1993)のようにレベルの異なった精緻化現象として捉え、音声、語彙、統語、意味、談話の5段階に分類するものや、上条他(1994)や中川他(1995)などように言い換え、繰り返し、挿入など言い直し方によって分類するものなどがある。神田他(1996)はこれらを踏まえ音声、統語、意味レベルに分類した上で、音声レベルにおいては言い間違いと言い淀みを、意味レベルでは精緻化、修正、間違いを下位区分し、さらに精緻化については繰り返しと言い換えに分類した。

本研究の資料に現れた言い直し箇所を神田他(1996)にならって分類すれば表IV2の通りになる。音声レベルの言い間違いが2、言い淀みが10、意味レベルでは精緻化が4(うち1例が修飾

間違いのレベルとタイプ	音声レベル	言い間違い		
		fnew28,29	三市で政令指定都市に移行すべし*するべきだという...	
		mnew11,12	西暦二千ご*二千年頃をめどに...	
		言い淀み	fkai25	お*隣近所のご近所の方ととても仲が良くて...
			fkai32	ん*ホントに
			fkai34,35	う*わたし*私ども一想像がつかないくらい...
			fkai39,40	で、そ*そういうときにその
			fkai45	い*意図したと
			fkai47	う*あの一
		mish19,20	んで*で旅行するから...	
		fish24,25	ホントにで*あの一 出ないようにしたらば...	
		mkom32,33	僕が中学んときから家族よ*四人なんですけどお...	
		mkom49,50	きり*きり止めて夕は、食んときだけえ	
	意味レベル	精緻化	修飾語を伴った繰り返し	fdit27,28
			言い換え	mkom36,37
				fdit24,25
				fdit36,37
		修正	mken27,28	それはどういことにか*ふうを考えたら...
			fkai22,23	それともう1つあら、ちょ*んーブイティーアールで気がついたのは
			fkai30	あ、*交わり
			fkai43	い、*自分の
			fkai44,45	しゃべ*い、意図したと
			mkom04	え、や、*硬かったら食えるんですけどお
			mkom07	ま、*すごい気持ち悪くてえ
			mkom11,12	い、*年に何回かだけそう一
			mkom36	だか、*でもそう
			mkom50	きり止めて夕は、*食んときだけえ
		間違い	fdit22,23,24	半分、あ、*こんぐらいまでが↑

語を伴った繰り返し、3例が言い換え)、修正が10、間違いが1箇所であった。神田他(1996)においても統語レベルは助詞の置換しか現れず、それだけを扱っているが、本研究では統語レベ

ルの言い直しに当たるものは見られなかった。ただし、統語レベルの言い直しに含めるべきかもしれないが、倒置的な表現はあった。しかし、語句の途中で言いつかえがないものは談話全体の音調へ特に影響しないため、ここでは扱わなかった。これらの言い淀みや言い間違いの中にはフィラーとの判別が難しいものやフィラーと共起するもあり、両者を完全に分けて論じることはできない。フィラーに関しては第3章の3-4-6でも触れたが、話者や場面により使用する語やそれぞれの使用頻度が異なる。本資料でも表IV3から分かるように「なんか(一)」は高校生の発話にのみ現れ、ニュースでは「え」しか現れないなど、談話や話者の社会的属性による違いが見られる。

しかし中川他(1995)によれば、「え」、「ま」、「あの」、「えと」、「あ」の5種で間投詞の出現総数の82%を占めるといい、フィラーとして使用頻度の高いものは全体としては限られていることが指摘されている。本資料に現れたフィラーもこの5種(それぞれの伸長型も含む)で全体の約85%を占めた。これらの出現箇所は表IV4の通りで、約半分はポーズ直後に現れ、次に句が続いている。ポーズの直前、つまり句(PPU)末には9%、句中には23%ほど現れている。中川他(1995)でも指摘されているように、これらのフィラーはポーズの直後に現れやすく、ポーズ直前には現れにくい傾向は、本資料からも確認できた。

最後に相づちに関して全体の傾向を概観する。相づちに関しては、これまでに水谷(1984)や、

	ニュース(男女)	女性司会	男性司会	女医	男医	女子高校生	男子高校生	合計
あの	0	6	0	8	14	2	0	30
ま	0	2	0	2	8	0	1	13
え	4	2	0	1	3	1	1	12
なんか	0	0	0	0	0	2	9	11
その	0	3	2	0	1	0	0	6
ええと	0	0	0	0	4	0	0	4
合計	4	13	2	11	30	5	11	76

	独立	句頭(ポーズ直後)	句末(ポーズ直前)	句中	合計	%
あの	6	14	3	7	30	39.5%
ま	1	7	1	4	13	17.1%
え	0	12	0	0	12	15.8%
なんか	3	2	4	2	11	14.5%
その	1	0	1	4	6	7.9%
ええと	1	2	1	0	4	5.3%
合計	12	37	10	17	76	
割合	15.8%	48.7%	13.2%	22.4%		

メイナード(1987)など日本語教育や日本語と他の言語との比較などの視点から研究がなされてきた。さらに言語表現にとどまらず、江川(1987)、米田(1987)、杉戸(1989)など、うなずきや笑いなどの非言語的な相づちについて扱った研究も見られる。相づちのタイミングを音響的に分析した杉藤(1993)や発話末の韻律的特徴と相づちを関連付けた堀内他(1996)の研究も注目すべきである。しかし杉藤(1999)は「日本語の談話における相づちの種類や頻度、およびその運用の実態を考察したものは意外に少なく、まだ断片的な見解が出されているのみである(水谷 1983、小宮 1986)」とも述べている。そこで、ここでは本資料の談話全体における相づちとイントネーションの関係を概観するにとどめるが、次節では各話者の談話におけるフィラーや言い直しとともに相づちの種類や頻度などの運用の実態に則して言及する。

音声を伴わないうなずきやアイコンタクトなどの相づち行動についてはここでは言及せず、談話全体の音調に影響すると考えられる発話された相づちのみを扱う。相づちの応答詞としては、聞いていることを示す「うん」、「ええ」、「はい」や共感や感嘆を示す「そうですね」、「はー」、「ふーん」、「うーん」、「へー」、「ほー」、「あー」などが見られた。相づちを打つ側の社会的立場が話し手より高い場合は、聞いていることを示す「うん」が多く、そうでない場合は「はい」、「ええ」が多いなど、対話者間の社会関係が相づちにも反映されている。さらに杉藤(1999)がすでに指摘しているように、親疎による相づちの違いも見られた。

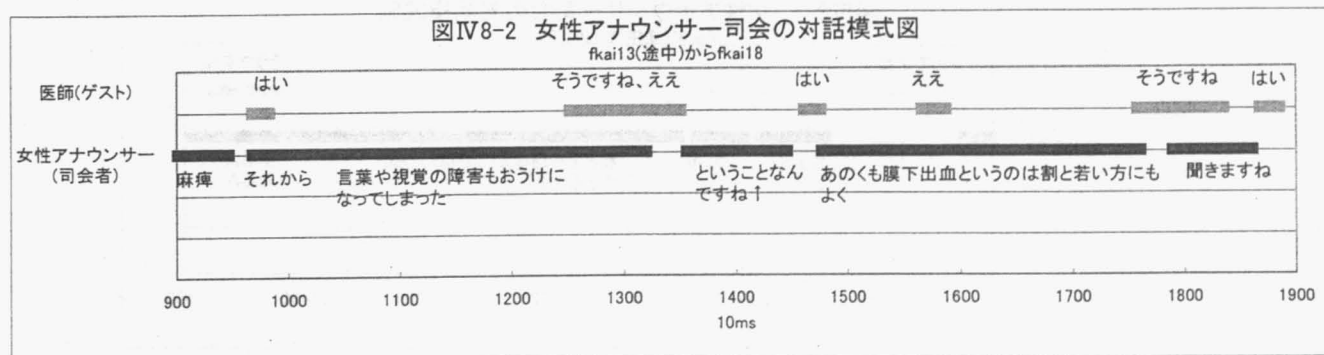
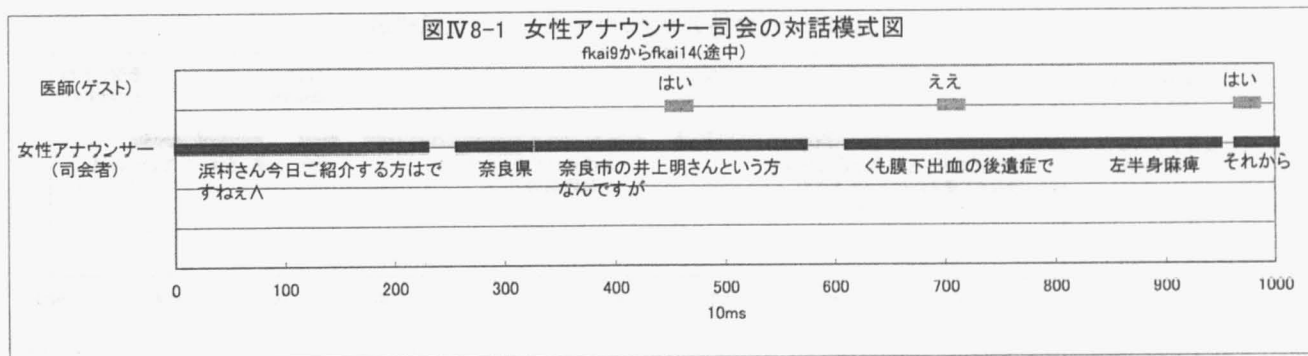
これらの相づちの出現箇所に関する詳細は次節に譲るが、ほとんどの相づちは発話者の発話が完全に終わらないうちに同じような調子で発話者の句末部にかぶさるように打たれる。そして特に昇降調(いわゆる「尻上がり」イントネーション)の部分に重なるように打たれることが多い一方で、停滞調の箇所および直後には打たれにくい傾向が全体的に見られた。このようにイントネーションの型によって相づちの出現頻度が異なっている点については、堀内他(1996)がすでに指摘している通りである。堀内他(1996)は「先行発話の終了を確認してから発話しているのではなく、終了を予測して発話を開始しているものが非常に多く存在する(話者交替の42%)」ことや、「先行発話が山型のピッチパタンの発話の場合、そのあとには「相づち」が挿入されやすい。」ことを指摘している。この「山型のピッチパターン」は本研究の「昇降調」にあたると思われるが、このイントネーションの91%で話者交代が見られ、そのうち95%が相づちであるという。さらに、本研究の平調、停滞調に当たると考えられる音調では相づちが打たれないことが多い点も堀内他(1996)は指摘している。

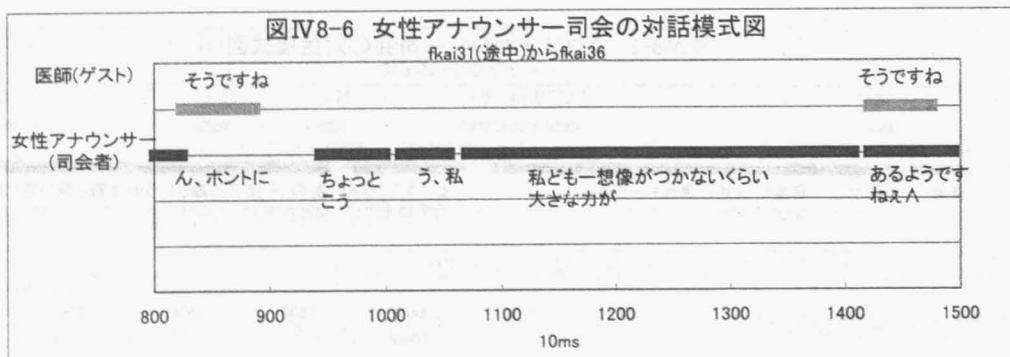
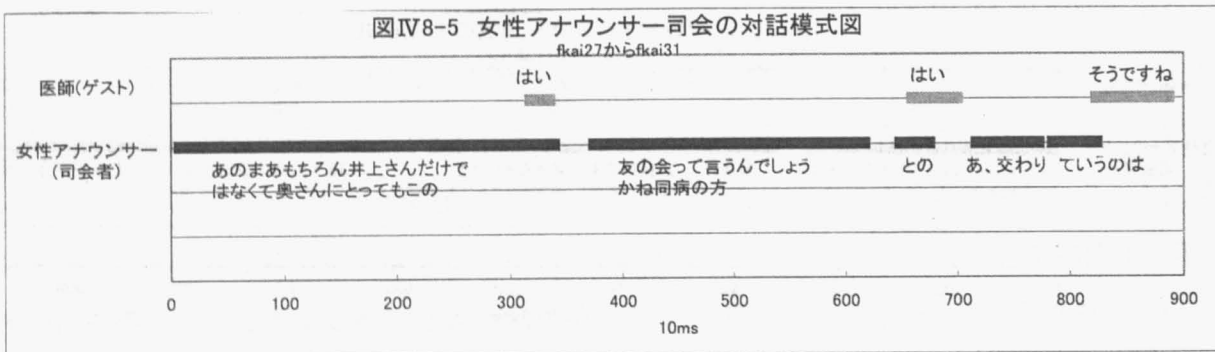
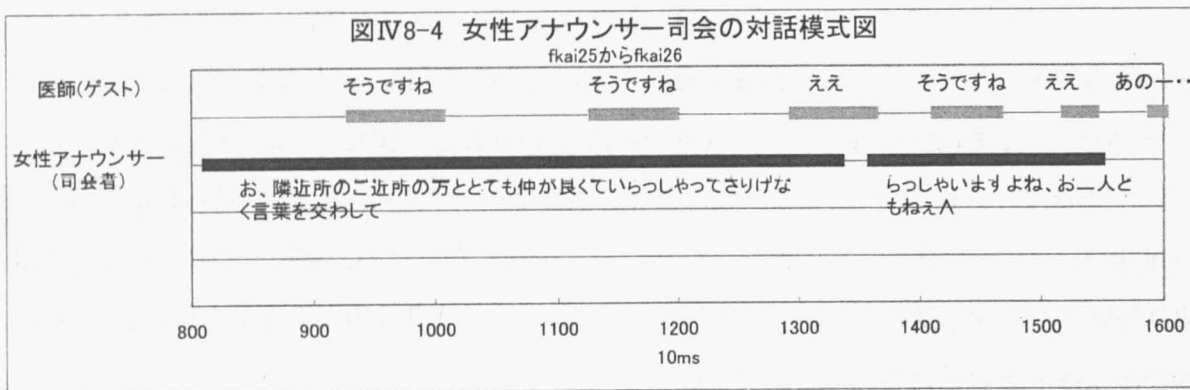
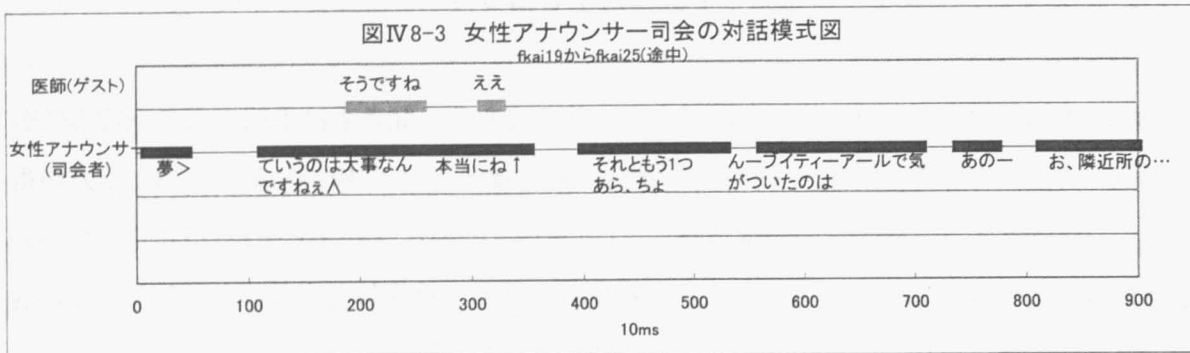
以上、言い直し、フィラー、相づちに関する本資料全体の傾向を概観した。次に各話者別にこれらがどのように現れ、全体の音調がどのようになっているか対話模式図をもとに詳しく検証していく。

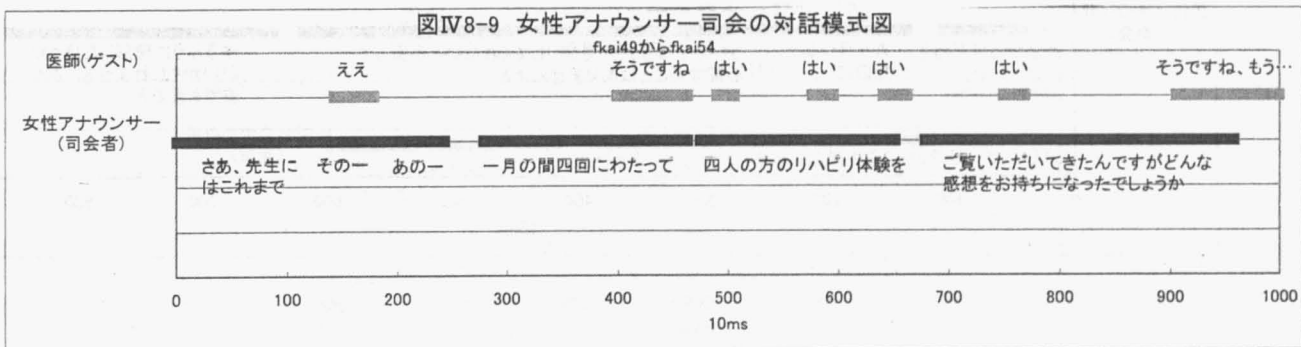
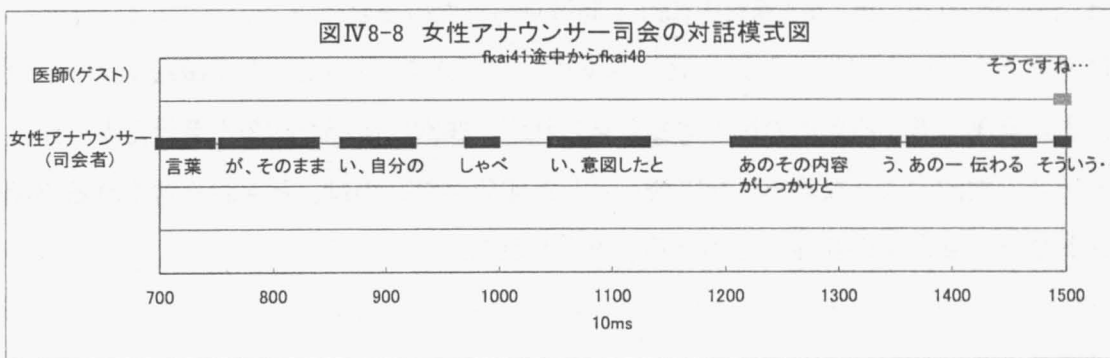
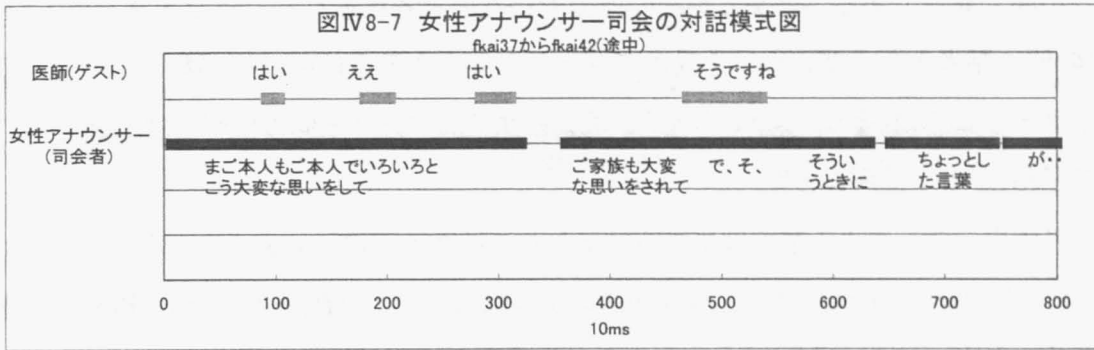
4-3-2. 女性アナウンサーの発話とそれに対する相づち

発話者は番組の司会者で 50 代の女性アナウンサーである。聞き手は番組のゲストで男性医師である。後述の 4-3-3 と同様、テレビの視聴者から見れば、この相づちを打っている方が番組のメイン話者である。相づちの頻度は高く、「ええ」、「はい」、「そうですね」が同じくらいの割合で見られた。相づちは PPU 末以外にも比較的多く現れ、重複部も多かった。ただし言い淀みや、停滞調の後には相づちは現れなかった(図IV8-1~9 参照)。

話者はアナウンサーだが、言い淀み(10 箇所)やフィラー(13 箇所)が意外に多かった。言い淀みは、「それともう一つあら、ちょ(ポーズ)、あのー」、「シャベ(ポーズ)い、意図したと」のように言い間違いをしたものや、次の言葉を言うときにつかえる「お、おとなり・・・」、「あ、交わり(ポーズ)」、「う、私(ポーズ)」、「で、そ(ポーズ)そういうときに」のようなパターンが見られた。フィラーは「あの」が 6、「その」が 3、「ま」と「え」が各 2 あったが「ええと」は見られなかった。言い淀みやフィラーが多く、その部分には相づちも少なくなるため、実際この談話の中間部は途切れ途切れな印象を受ける。またピッチレンジは後述する 4-3-4 の女性医師と同様に大きく、抑揚のある話し方と言えるだろう。







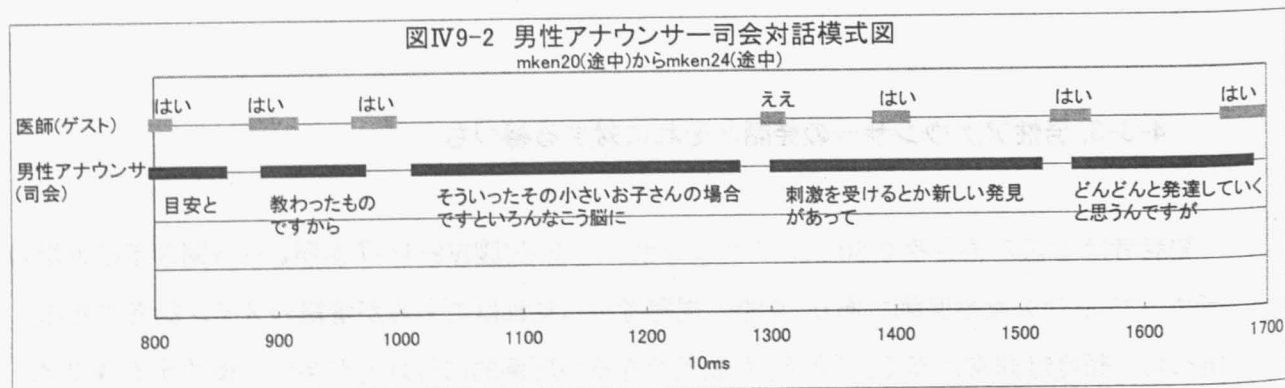
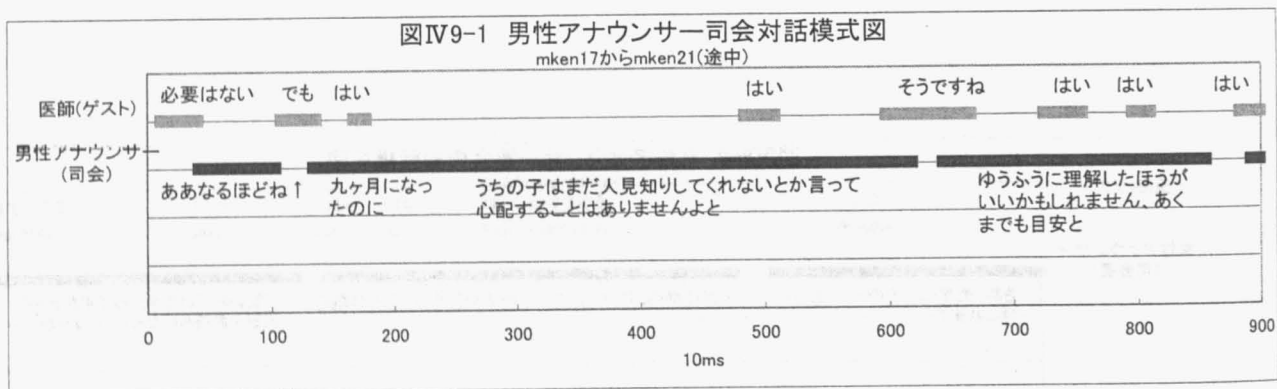
4-3-3. 男性アナウンサーの発話とそれに対する相づち

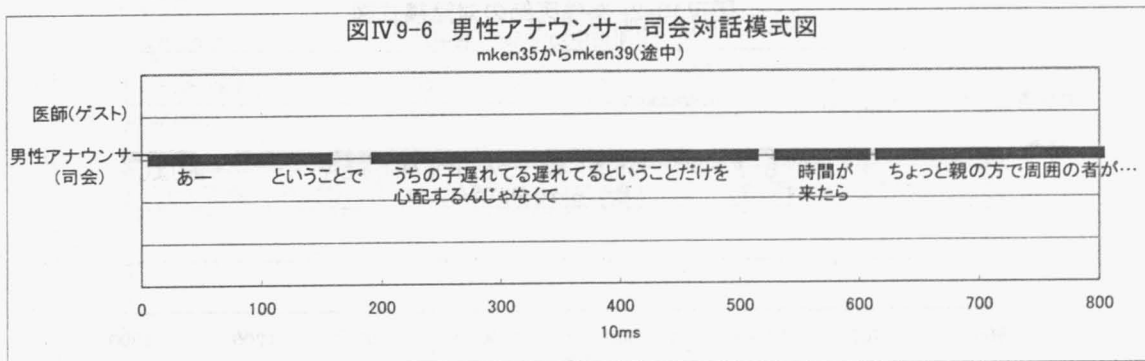
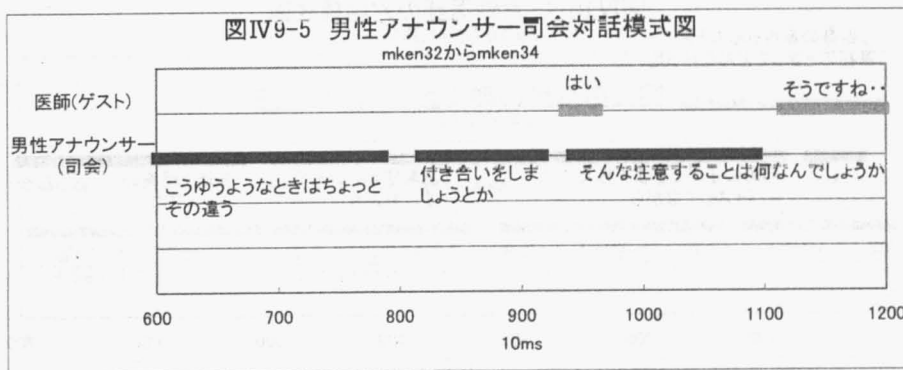
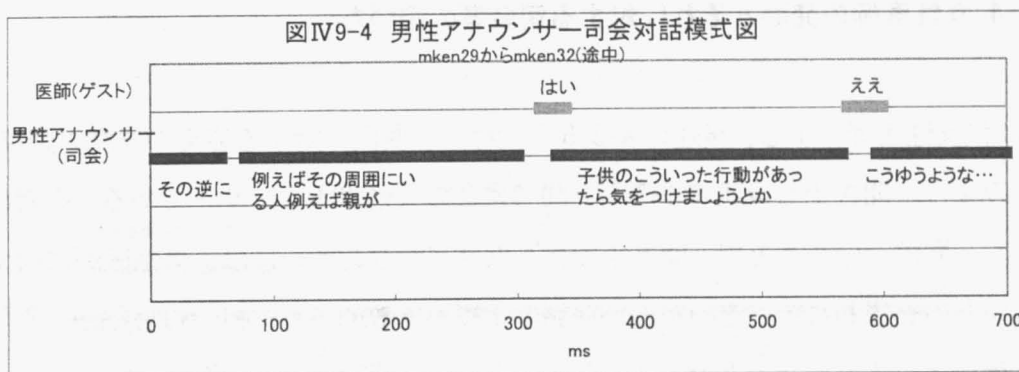
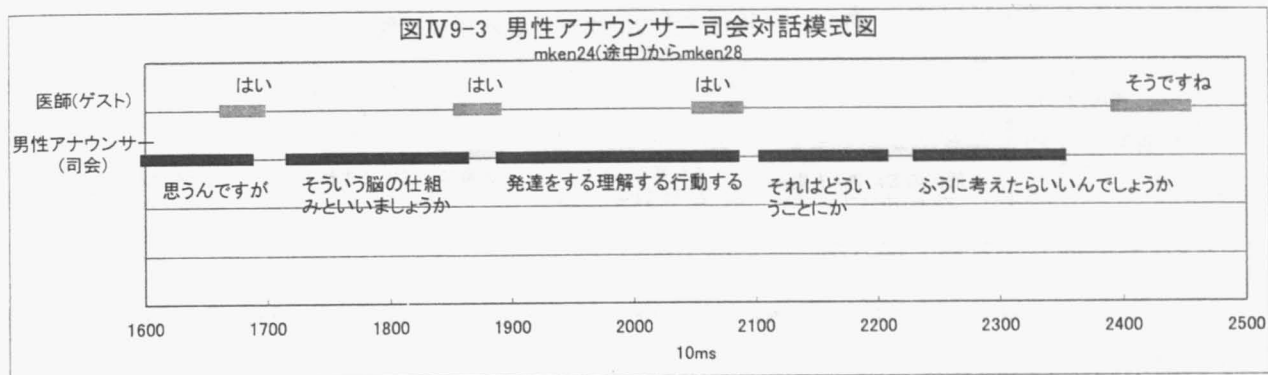
発話者は番組の司会者で50代のアナウンサーである(図IV9-1~7 参照)。一方聞き手は番組のゲストで40代の女性医師であり、実際の視聴者から見ればこちらが番組のメイン話者である。相づちの頻度は非常に高く、「ええ」も散見できるが圧倒的に「はい」が多い。後述する 4-3-4、4-3-5 はスタジオには子供もいて比較的なごやかな雰囲気であるのに比べ、この談話は先述の 4-3-2 と同様、改まりの度合いがより高い場面であること、さらに年齢に関して言えば、司会

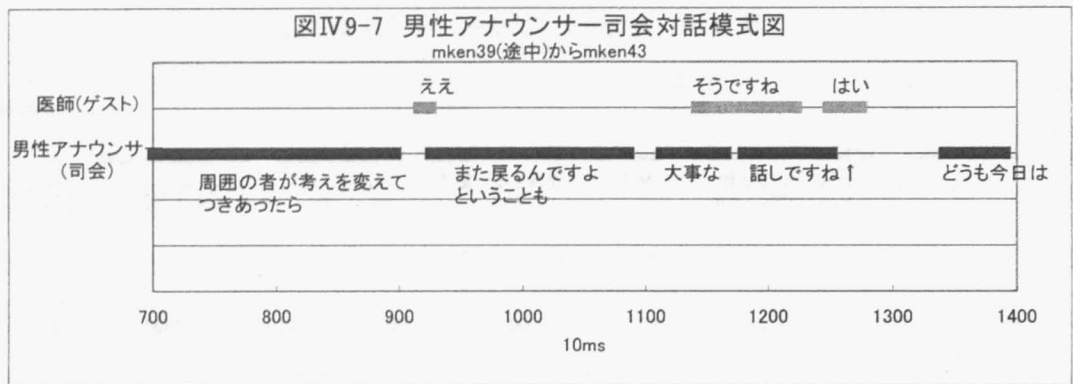
者の方が高く異性であることなどがその原因であろうと考えられる。また同意を表す「そうですね」の他、話者からの問いかけを受けて聞き手が答えを言う前の、相づちとしてというよりはフィラーとしての「そうですね」も見られた。男性アナウンサー側の相づちは、「あー」と「あーなるほどね」が各1箇所あった。

このアナウンサーによる談話は単位時間あたりの拍数の平均も6人の中でもっとも多く、非常に早口な印象を受ける。しかし、ニュースのような淡々とした調子ではなく、緩急が大きい。句末のイントネーションは「ですね」にかかる昇降調と、「～ね」などの上昇調3箇所以外はすべて平調だった。

また、言い淀み(言い直し)は資料中には1箇所見られた(「それはどういうこのにか(ポーズ)、ふうに考えたらいいんでしょうか。」)が、「あー」や「ええと」のような明確なフィラーは見られず、また言葉を考えるための拍の伸長も見られず、非常に流暢な印象を受けたが、かといってニュースの朗読のようなそっけない淡々とした印象がないのは、ときおり含まれる平調以外のイントネーション型の存在のためだろうと思われる。

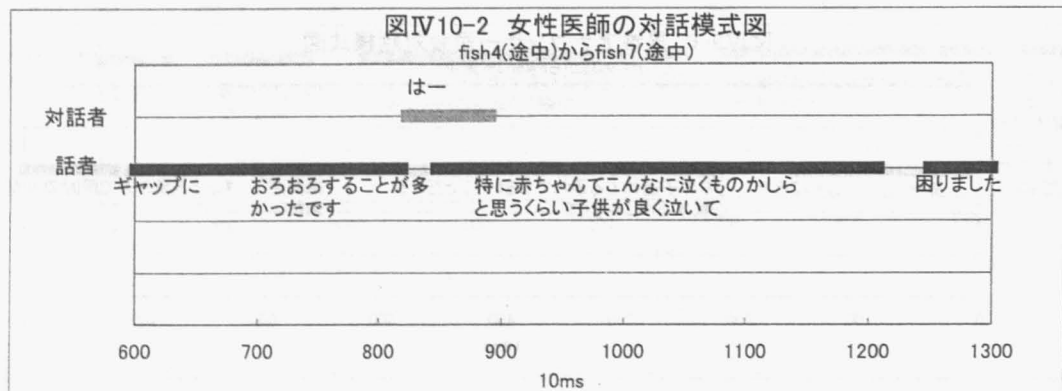
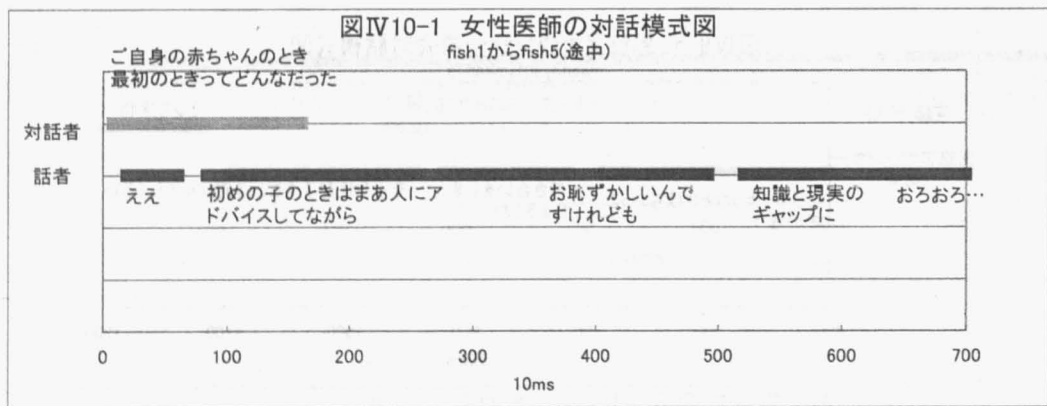






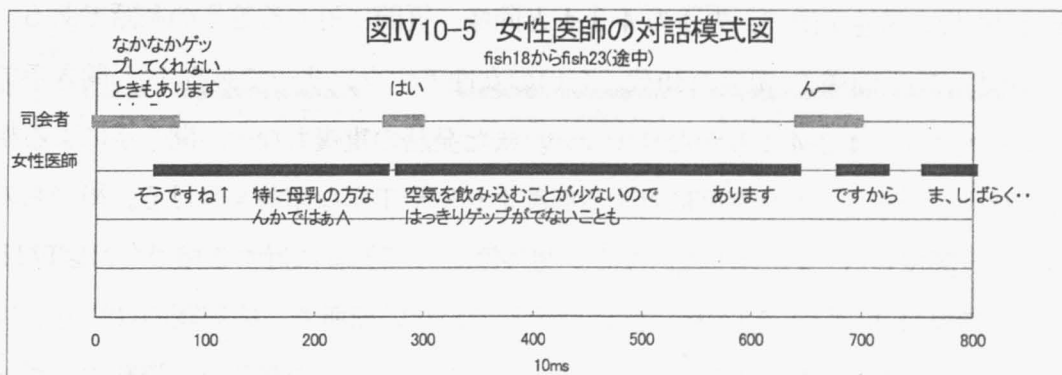
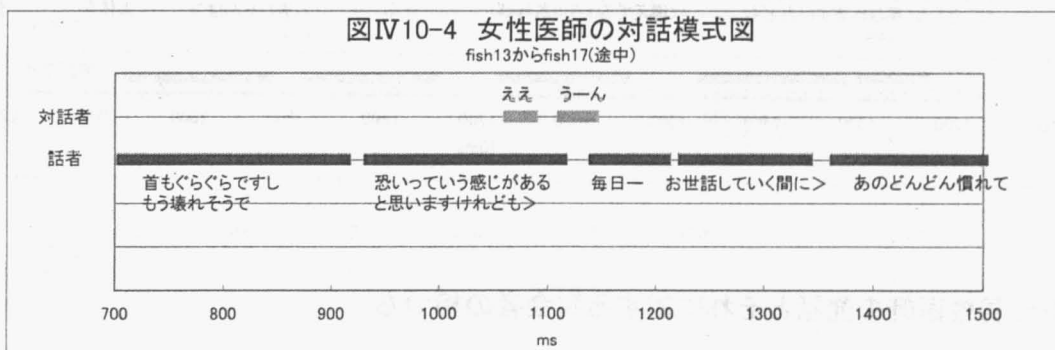
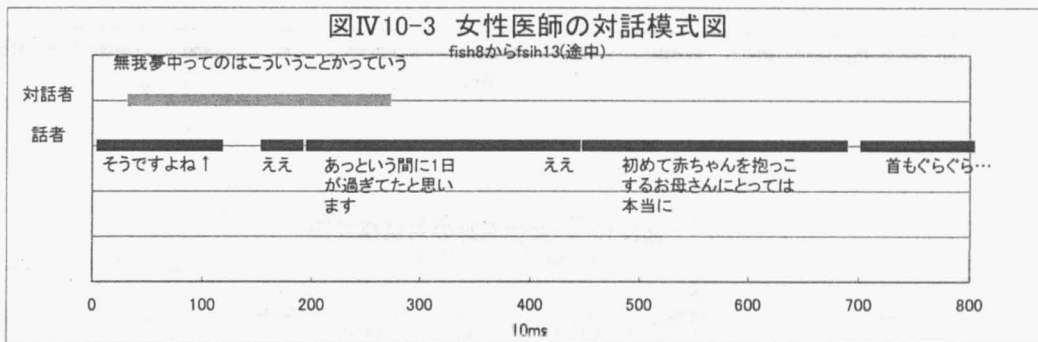
4-3-4. 女性医師の発話とそれに対する司会者の相づち

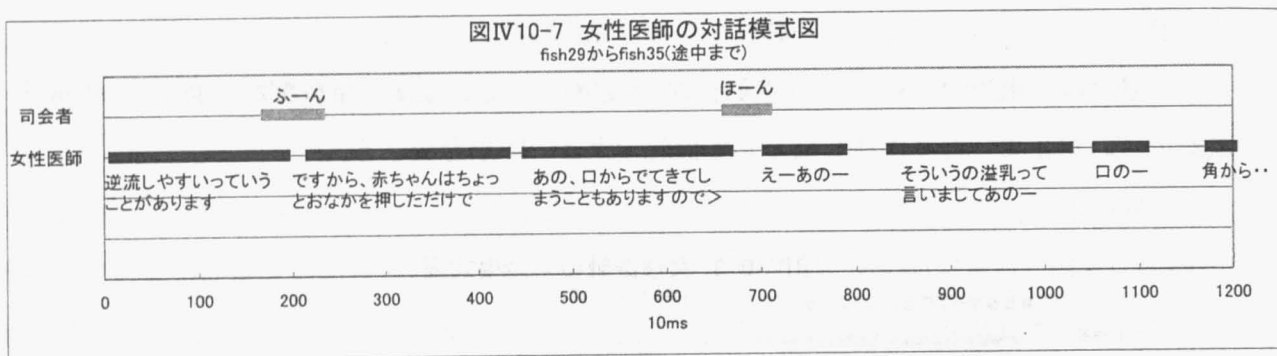
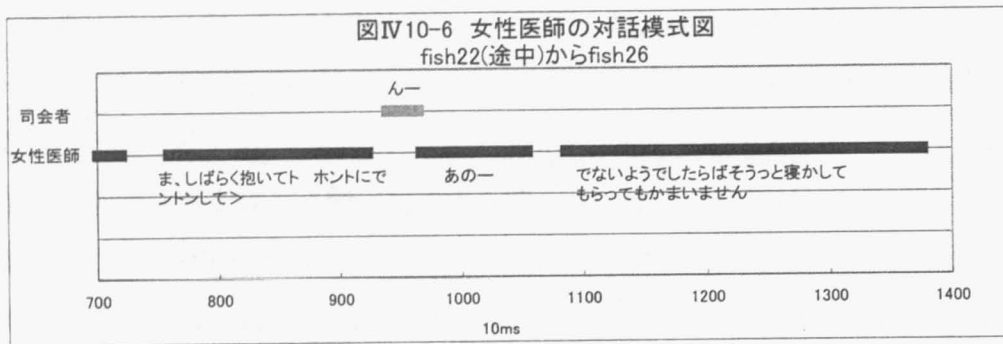
次に40代女性医師による、後述の4-3-5と同様の、質問に対する答えの発話を図IV10-1~8から見てみよう。聞き手も後述の4-3-5と同じ司会の女性アナウンサーである。両者の年齢も比較的近く、同性ということで、聞き手である女性アナウンサーには、男性医師に対するよりは親近感があると思われる。そのためか発話の重複が比較的多く、相づちも「んー」や「ふーん」などが6箇所と、より改まった感じの「はい」、「ええ」(2箇所)よりも多かった。



一方、女性医師の発話の特徴としては、平均ポーズ長が短く、ピッチレンジが大きい点が挙げられる。これは先述した4-3-2の女性アナウンサーとも共通の特徴である。フィラーは全部で11あり、「あの一」類が8箇所と全体の8割近くを占め、「えー」は1箇所あるが、資料中には「ええと」や「えっとー」は見られなかった。聞き手の言い挿しに対する女性医師の相づちは「ええ」が多く、「そうですね」、「そうですよね」が各1あった。また時間稼ぎ的な停滞調もいくつか見られた(「毎日ー」や「口の一」)。資料中ポーズで途切れる言い淀みは「ホントにで(ポーズ)、あの一」の1箇所だけ見られた。イントネーションに関しては、句末が強調的なものが他の5人の話者に比べ比較的多く、昇降調は1つだけ見られた。

この談話は、重複などもあり、抑揚もやや大きめである。全体に早口だが、言い淀みがあり談話の流れが止まったり停滞したりして緩急の大きい印象を受ける。

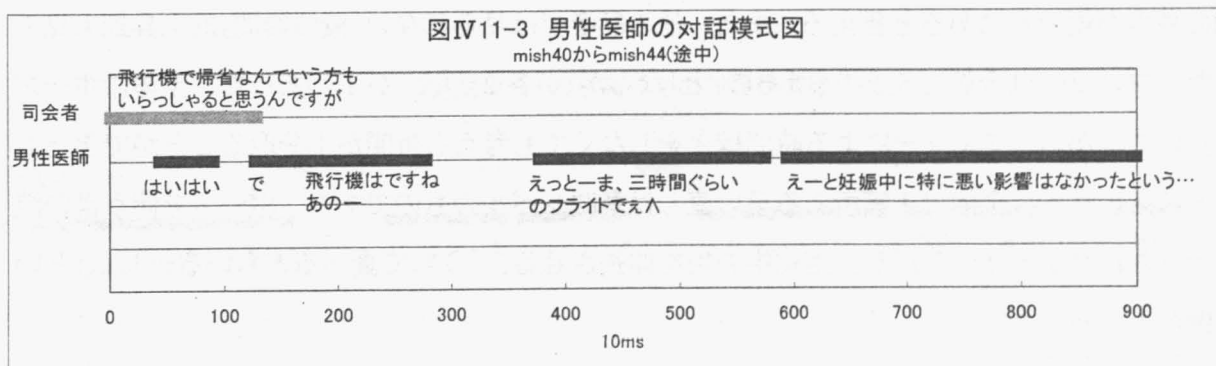
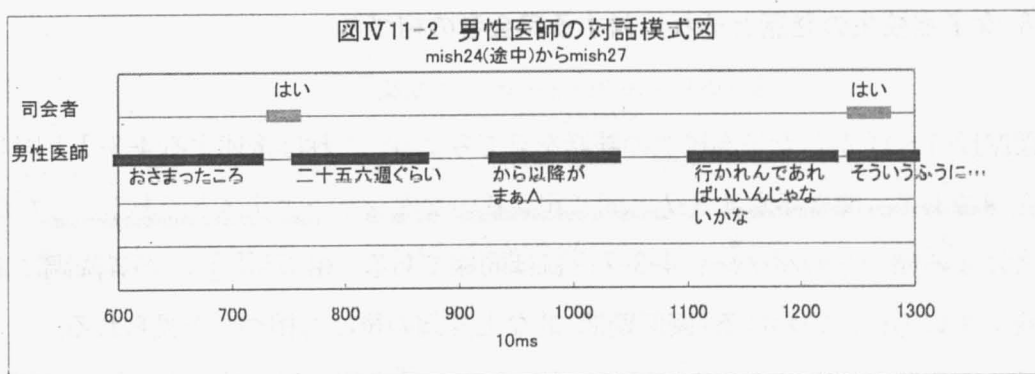
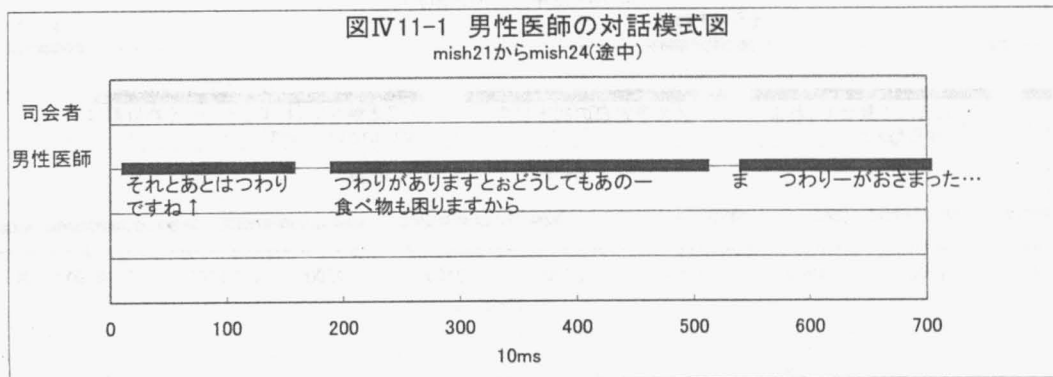


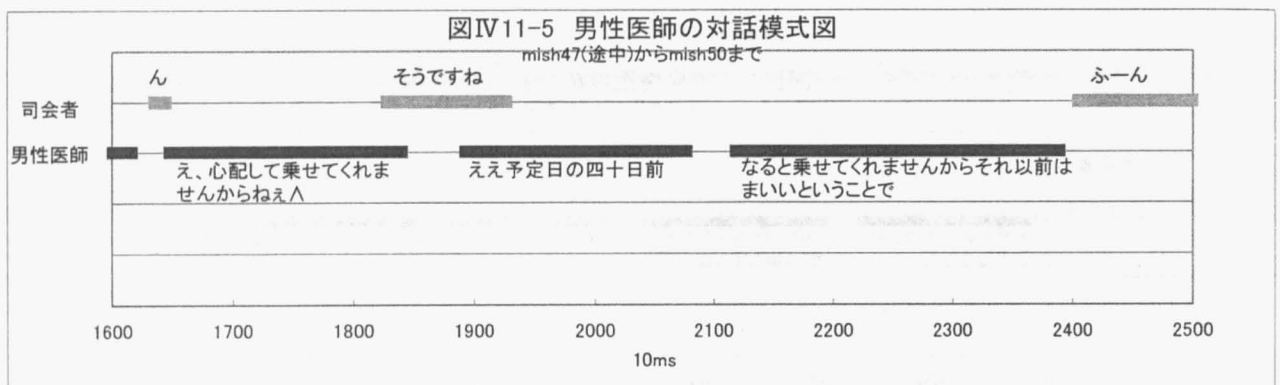
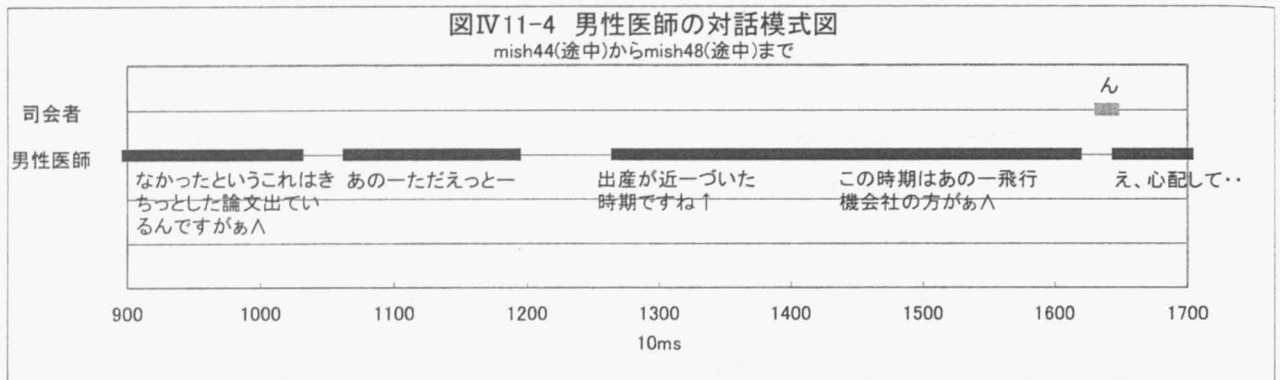


4-3-5. 男性医師の発話とそれに対する司会者の相づち

発話者は 40 代の男性医師で、先述の 4-3-4 と同様、質問に対する答えの発話である。相づちの発話者(聞き手)も同様で、司会の 40 代くらいの女性アナウンサーである。同じ聞き手でも、相づちの頻度は前述の 4-3-4 よりかなり少ない。また発話の重複もない。聞き手による相づちは「はい」の割合が大きく、女性医師に対する態度よりやや丁寧な印象を受ける。相づちの出現箇所については図IV11-1~5 に示した。また、男性医師の司会者に対する相づちは図IV11-3 の「はいはい」、図IV11-5 の「ええ」の他、図には示していない箇所、応答詞の「はい」と「いえ」が各 1 回見られた。男性医師の発話について言い淀みやフィラーを見ると、資料中、ポーズに

よって区切られる言い淀みは見られないが、「出産が近一づいた時期ですね」のように語中で拍が伸長するケースや、「25、6 週ぐらい(ポーズ)、から以降がまあ(ポーズ)、」のような、ポーズが文節末に来ないケースがあった。また「あのー」が 14、「まあ」が 8、「えっとー」が 4 など、合計 30 もフィラーが見られ、6 話者のうち最も使用数が多かった。「～ですね」のようなポーズによらない、ある種の時間稼ぎ的表現が多く、句末が昇降調になっているものも見られた。言い淀み箇所がない代わりにフィラーやイントネーションで考える時間が確保されているため、無音区間によって談話の流れが途切れるということはありませんが、昇降調やフィラー、及びその停滞調が多いせいか、それほど流暢な印象は受けない。





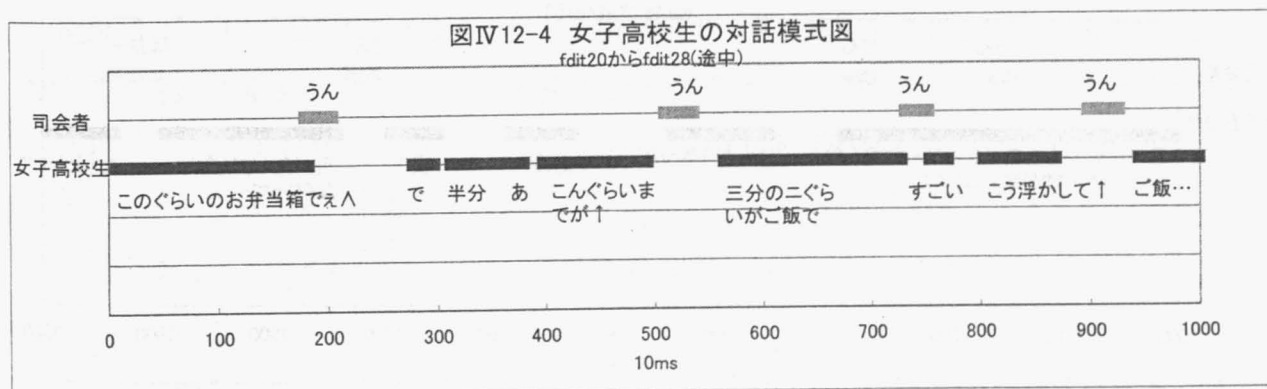
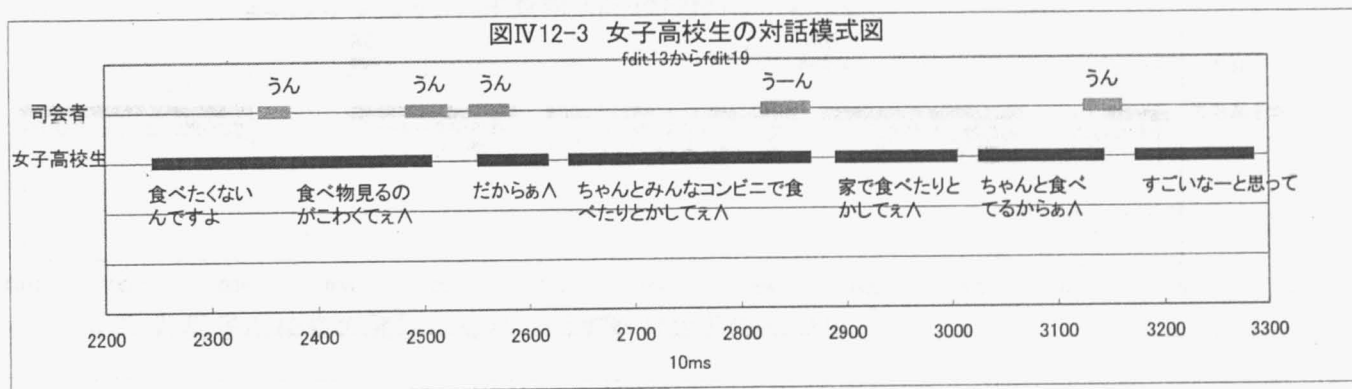
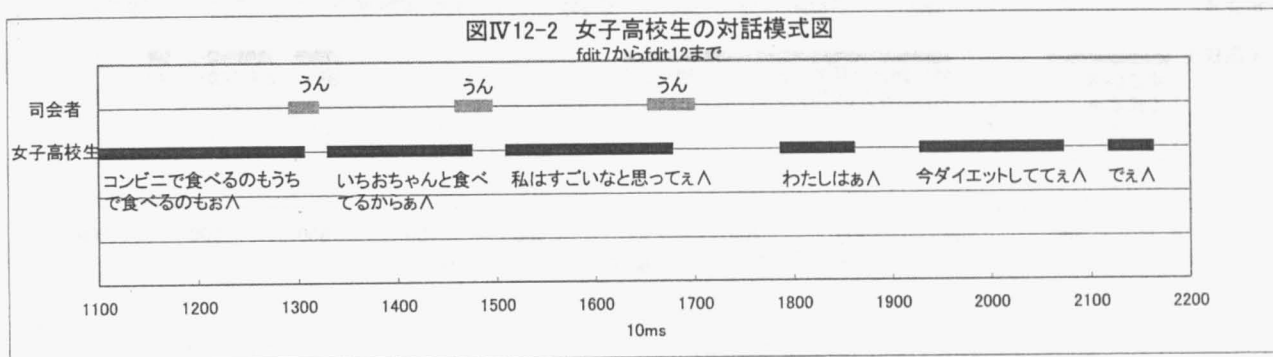
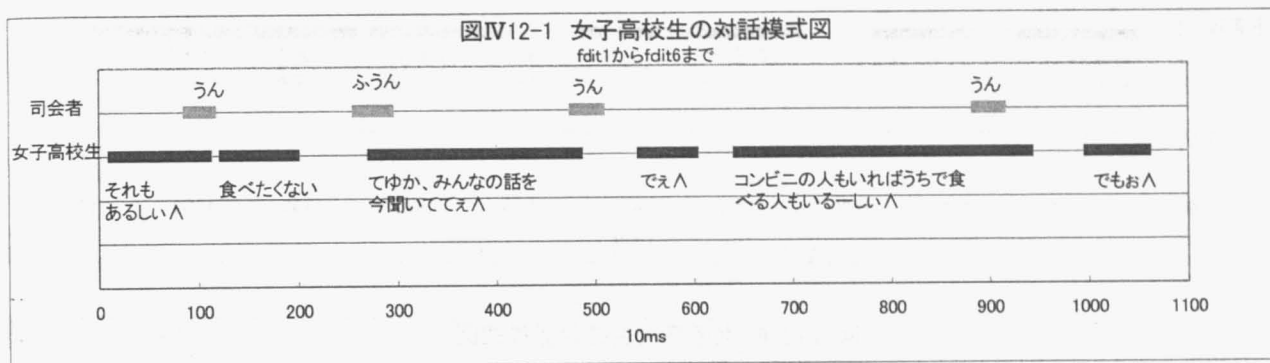
4-3-6. 女子高校生の発話とそれに対する司会者の相づち

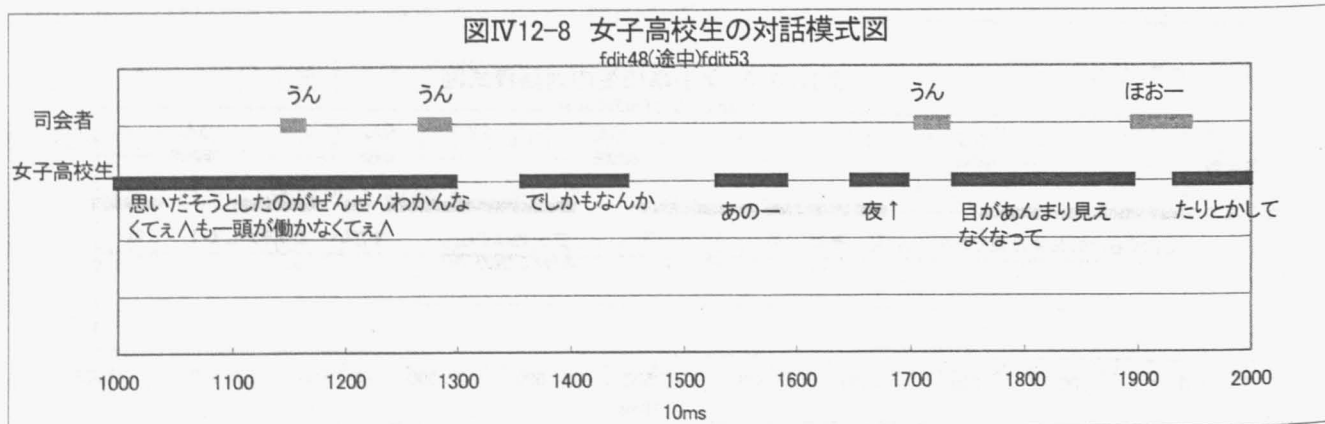
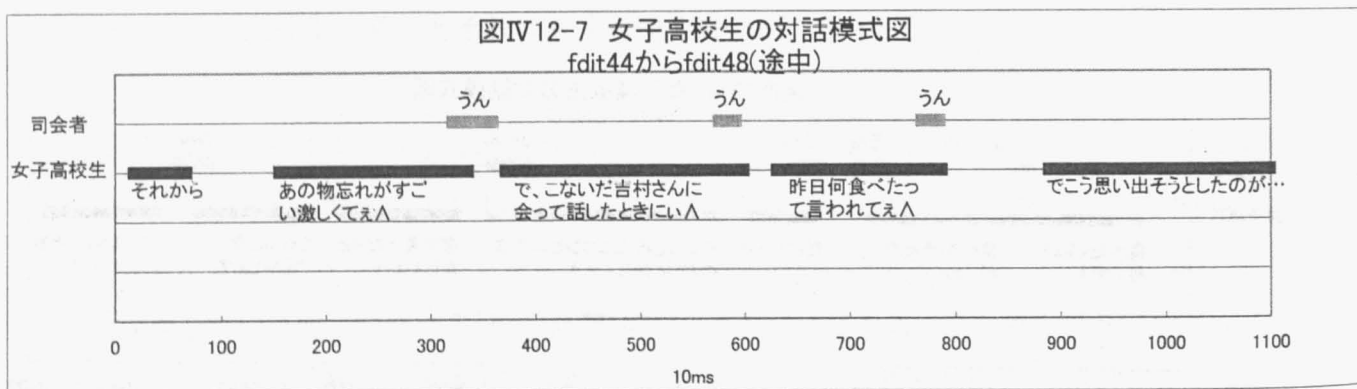
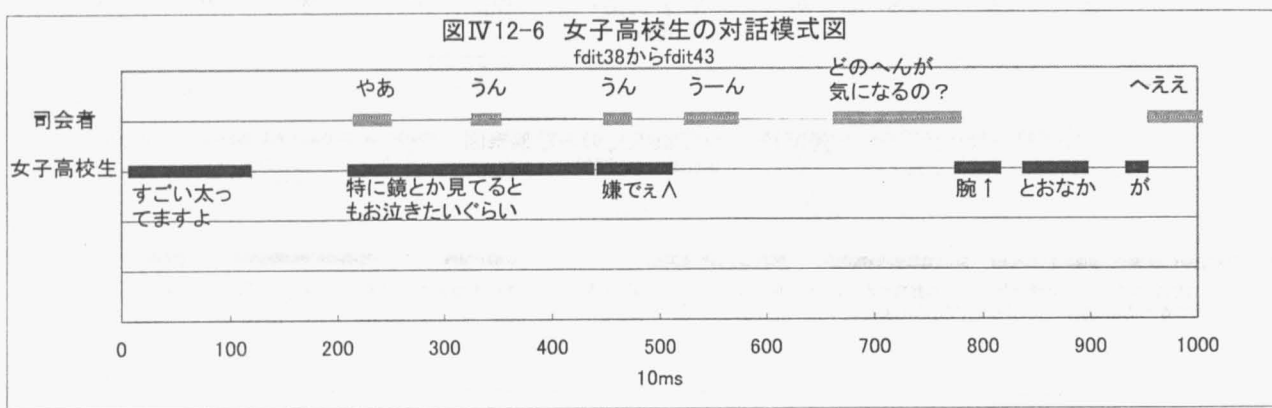
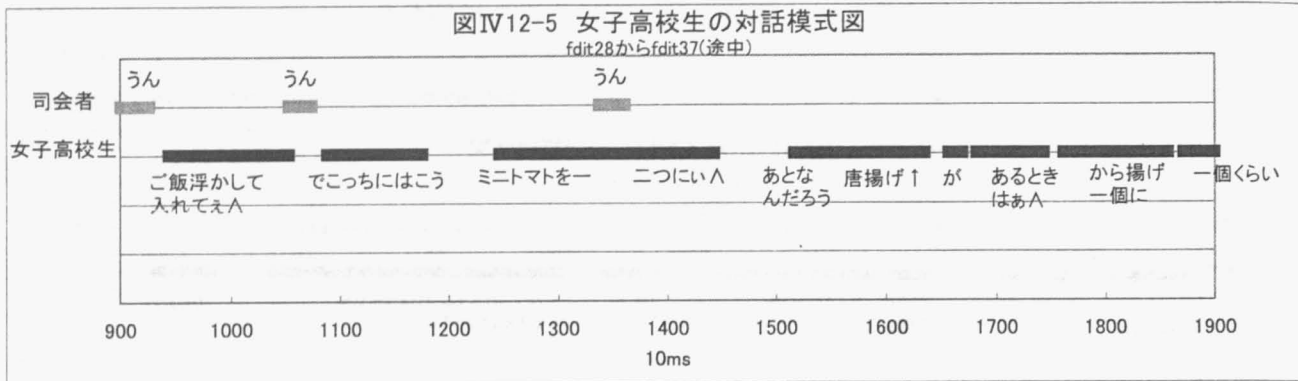
次に、図IV12-1～11 から女子高校生の談話を見てみよう。これは後述する 4-3-7 と同じ討論番組での発言である。聞き手も 4-3-7 と同じ司会者の女性ジャーナリストである。したがってこの司会者による相づちのパターンも 4-3-7 とほぼ同様である。相づち「うん」が昇降調に重なるように出現している他、いわゆる「擬似疑問」的な上昇調の後にも相づちが見られる。

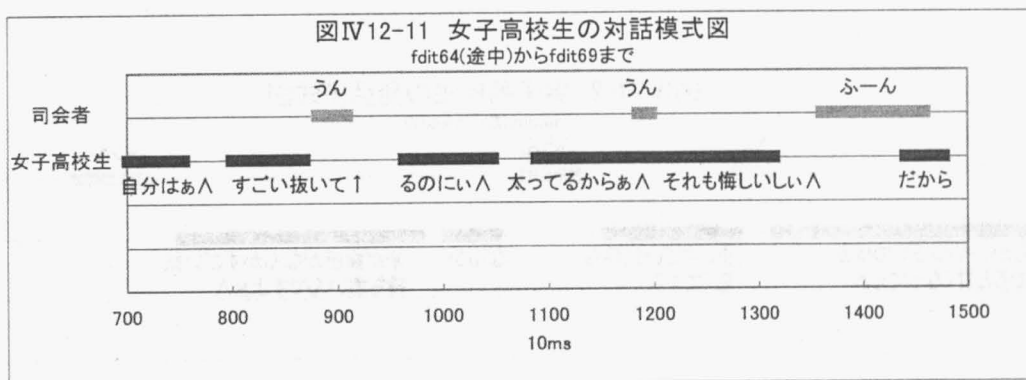
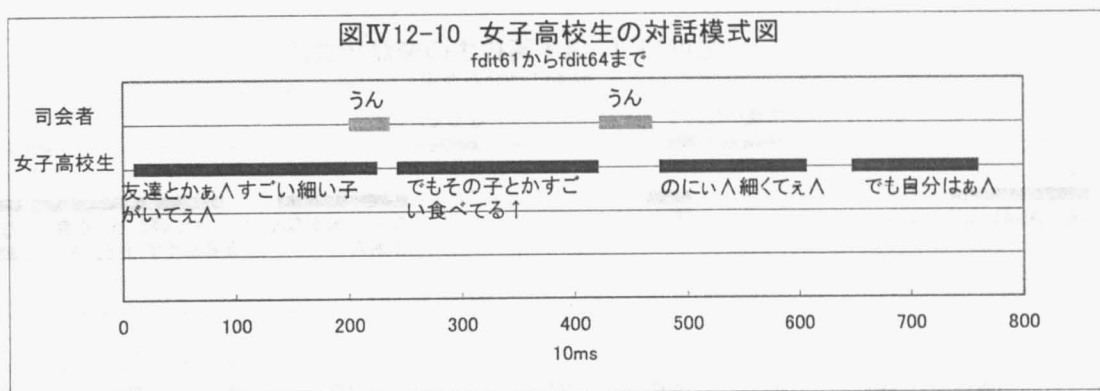
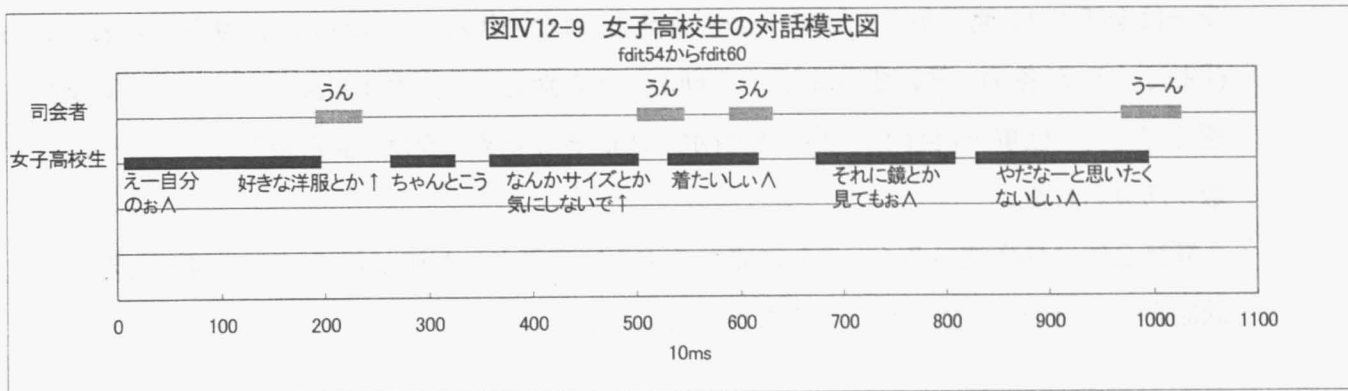
女子高校生の発話の特徴は 4-3-7 の話者以上に句末の昇降調の割合が高く、ポーズが長い点、句の長さが短い点にあると言える。また、他の話者では見られない「擬似疑問」的な上昇調も見られた。フィラーは全部で 5 あり、「あの」と「なんか」が各 2、「え」が 1 つあった。全体にポーズが長いことから、フィラーによる時間稼ぎをしなくても考える時間が十分取ることができたものと考えられる。全体で 4 箇所ある言い直しは意味レベルのものであり、ポーズを伴う言い淀みは見られなかった。ただし、語句中の拍を伸長させる、「うちで食べる人もいるーしい」という例が 1 つあった。

昇降調が多い箇所では相づちとあいまって、4-3-7 の談話と共通の調子が感じられるが、擬似疑問の上昇調が多用される部分は、それとはまた違った調子に聞こえる。これを自信のなさ

であると聞く人もいるだろうが、筆者は話者が「こんなこと言って大丈夫だろうか」、「発言を続けてもいいだろうか」と遠慮しつつ話しを続けているように感じた。







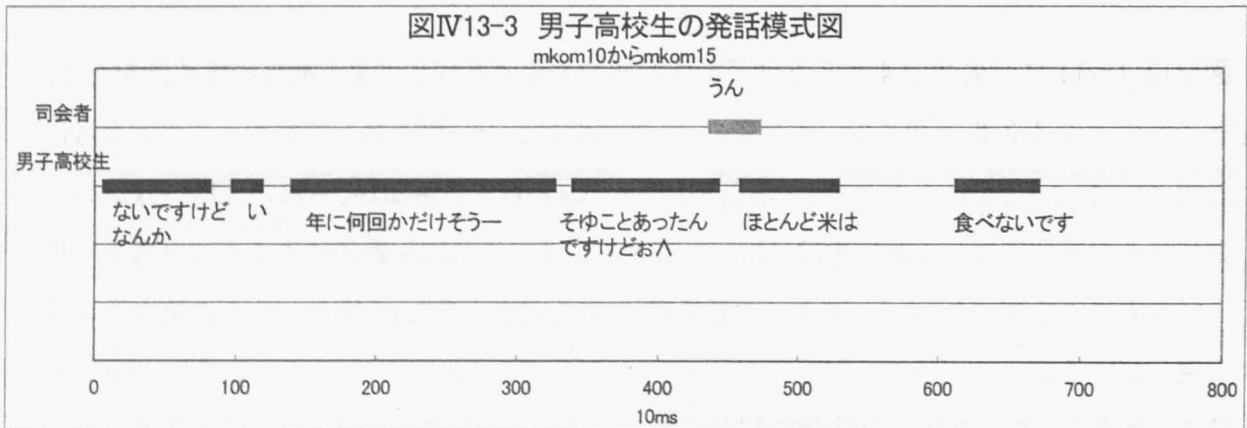
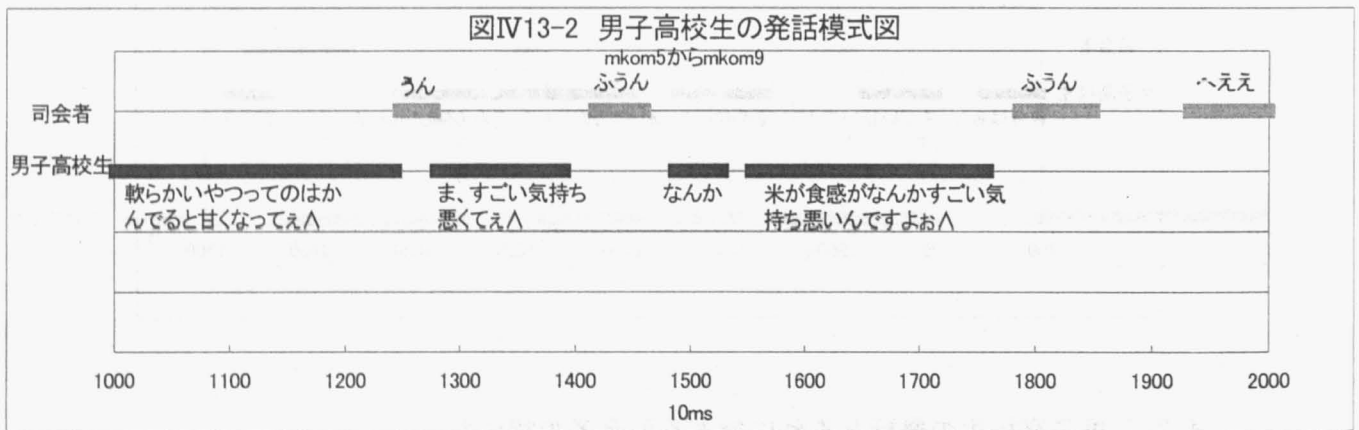
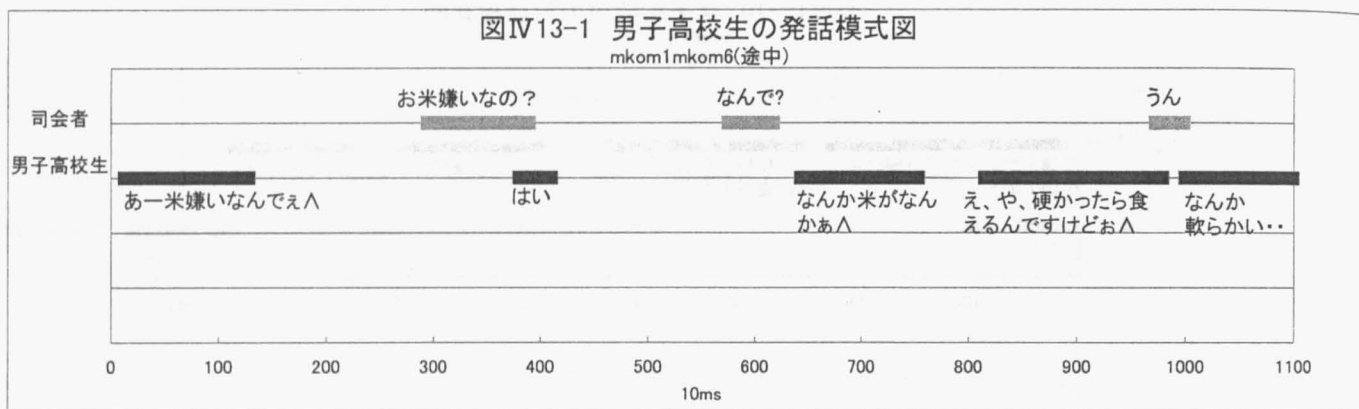
4-3-7. 男子高校生の発話とそれに対する司会者の相づち

図IV13-1~11には先述の4-3-6と同じ討論番組での男子高校生による発言の模式図を示す。聞き手も先述の4-3-6と同じで、司会者の40代の女性ジャーナリストである。この司会者による相づちは「うん」がほとんどで、「ふうん」や「へえ」が散見できるが、「はい」は見られない。一方司会者の質問に対して高校生は「はい」と答えている。これは年齢差によるものと考えられる。司会者による相づち「うん」はすべて昇降調(句末も句中も含む)の後か、そこに重なるように出現している。

話者の特徴として、句末の昇降調の割合が高く、ポーズの長さが長い点が挙げられる。フィ

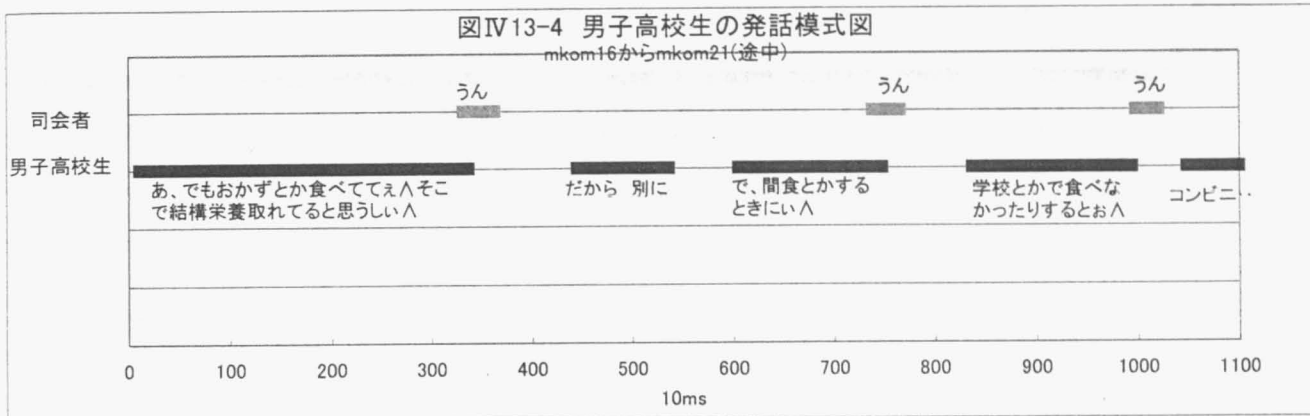
ラーは全部で 11 箇所あり、「あの一」や「ええと」はない代わりに「なんか」が 9 箇所現れている（「ま」、「え」が各 1）。言い淀みは「え、や硬かったら食えるんですけどお」、「ま、すごい気持ち悪くてえ」、「仕事一回(ポーズ)、きり(ポーズ)、きり止めて夕は、食ん時だけえ(ポーズ)」など数ヶ所見られた。

談話全体は昇降調が多く、それに重なるように発話された相づちが「合いの手」効果をあげ、談話全体の調子が形成されているように聞こえる。



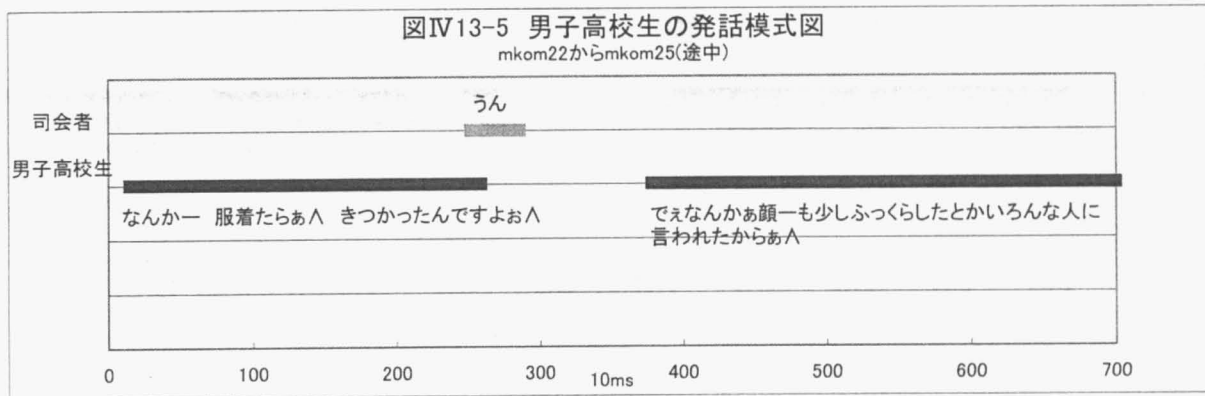
図IV13-4 男子高校生の発話模式図

mkom16からmkom21(途中)



図IV13-5 男子高校生の発話模式図

mkom22からmkom25(途中)



図IV13-6 男子高校生の発話模式図

mkom25(途中)からmkom28



図IV13-7 男子高校生の発話模式図

mkom29からmkom33(途中)

